

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 複数の脚本コーパスに現れた終助詞の比較分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2020-02-06 キーワード: 日本語日常会話コーパス(CEJC), 脚本コーパス 作成者: 松下, 晶子, 丸山, 岳彦, Matsushita, Shoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002551">https://doi.org/10.15084/00002551</a>

## 複数の脚本コーパスに現れた終助詞の比較分析

松下 晶子（専修大学大学院）\*

丸山 岳彦（専修大学 / 国立国語研究所）

### Analysis of Sentence Final Particles Appeared in Two Scenario Corpora: A Comparative Study

Shoko Matsushita (Graduate School of Letters, Senshu University)

Takehiko Maruyama (Senshu University / NINJAL)

#### 要旨

本稿では、脚本のテキストデータから構築したコーパスを分析した結果について述べる。今回、既に構築済みの『市川森一脚本コーパス』に加え、新たに『鎌田敏夫脚本コーパス』を構築した。これにより、違う書き手によって書かれた脚本の比較が可能となった。

松下・丸山（2018）および松下（2019）では、『市川森一脚本コーパス』において主に終助詞に焦点を当て、分析を行い、性差が表れやすい終助詞の多用や、場面によって終助詞の表記が変わるといった点を明らかにした。今回、『鎌田敏夫脚本コーパス』に現れた終助詞の分布を分析し、『市川森一脚本コーパス』の終助詞の分布と比較した。その結果、2人の脚本家の間で終助詞の使用傾向が異なることがわかった。さらに実際の会話を収録した『日本語日常会話コーパス（CEJC）』で用いられる終助詞との比較を行ったところ、「話すことを前提として書かれた言葉」と実際の話し言葉では終助詞の分布が異なることがわかった。

#### 1. はじめに

脚本は、何言葉だろうか。書き言葉だろうか。話し言葉だろうか。脚本として書かれているものだから書き言葉である。しかしひとたび役者によって読まれればそれは話し言葉となる。本稿では、脚本のテキストデータから構築した「脚本コーパス」を用いて、文体分析のひとつとして、終助詞の分析を行う。終助詞分析を通して、「話すことを前提として書かれた言葉」という特徴的な性質を持つ脚本の文体を明らかにしていきたい。

#### 2. 目的

本稿の目的は、脚本というメディアのもつ文体的な特徴を見つけることである。本研究に先駆けて、松下・丸山（2018）および松下（2019）では、『市川森一脚本コーパス』に現れた終助詞の分析を行い、脚本の持つ文体的特徴の可能性として以下の点を挙げた。

1. 終助詞が役割語として多く使われ、役者が演じる際、登場人物の性格や特徴などをくみ取りやすくしている。

---

\* arukumatsushita@gmail.com

2. カタカナで表記された終助詞は、意図的に表記を変えることで、それが用いられている場面で作者が表したいことがより明確に伝わりやすくなる効果がある。

本稿では、『市川森一脚本コーパス』の終助詞分析でわかった点を踏まえつつ、今回新たに構築した『鎌田敏夫脚本コーパス』を用いた終助詞分析を行う。2人の脚本家による脚本コーパスを比較し、その終助詞の種類や用法について、相違点や共通点を見つけ出す。さらに、『日本語日常会話コーパス (CEJC)』で用いられる終助詞との比較も行い、分布の違いや共通点を見つけ出す。「話すことを前提として書かれた言葉」と実際の「話し言葉」の2つの比較を通して、脚本の文体的特徴を見つけ出すことを目的とする。

### 3. 使用したコーパスについて

この節では、本稿において新たに追加した『鎌田敏夫脚本コーパス』について述べる<sup>(1)</sup>。

鎌田敏夫氏 (1937～) は、1967年に『でっかい青春』で脚本家デビューして以降、『飛び出せ！青春』『俺たちの旅』など、“青春ドラマシリーズ”を生み出してきた脚本家である。1983年、『金曜日の妻たちへ』が大きな反響を呼び、1986年、『男女7人夏物語』が大ヒット、翌1987年の続編『男女7人秋物語』は、高視聴率を記録した。1994年には『29歳のクリスマス』で芸術選奨文部大臣賞、第13回向田邦子賞受賞している。2016年4月には、日本脚本家連盟理事長に就任している。

今回、『鎌田敏夫脚本コーパス』としてコーパス化したのは、以下の7作品である。

1. 1972年放送：『飛び出せ！青春』（1988年、径書房）
2. 1983年放送：『金曜日の妻たちへ（上）』（1983年、大和山出版社）
3. 1983年放送：『金曜日の妻たちへ（下）』（1983年、大和山出版社）
4. 1985年放送：『金曜日の妻たちへ 一恋におちて一』（1986年、立風書房）
5. 1986年放送：『男女7人夏物語』（1986年、立風書房）
6. 1987年放送：『男女7人秋物語』（1987年、立風書房）
7. 1988年放送：『ニューヨーク恋物語』（1988年、立風書房）

『市川森一脚本コーパス』を構築した際と同様、全ページをOCRで読み込み、人手で校正したうえで、テキストファイルを作成した。さらにMecab + unidic-cwj-2.3.0で形態素解析を実施した。総語数は752,936語、記号・補助記号などを除くと469,574語だった。

ただし、1969年から2011年までの作品を収録していた『市川森一脚本コーパス』とは異なり、『鎌田敏夫脚本コーパス』に含まれるのは一部をのぞいてすべてが80年代の作品である。年代比較をする際は、市川森一の80年代の作品との比較が前提となることを断っておく。

### 4. 分析

#### 4.1 『市川森一脚本コーパス』と『鎌田敏夫脚本コーパス』の終助詞

本節では、『市川森一脚本コーパス』と『鎌田敏夫脚本コーパス』の終助詞を分析し比較した結果について述べる。

<sup>(1)</sup> すでに構築済みの『市川森一脚本コーパス』については、松下・丸山 (2018) を参照のこと。

表 1 に各コーパスの総語数、総終助詞数、総語数に占める終助詞の割合を示す。

表 1 市川森一と鎌田敏夫の脚本コーパスの総語数と終助詞数

	総語数	終助詞数	割合
市川森一	449,411	12,716	2.83%
鎌田敏夫	469,574	21,920	4.67%

※ 総語数には記号・補助記号類は含まない

鎌田敏夫は総語数のうち、終助詞の使用率が約 5% 近くを占めており、約 3% の市川森一を大きく上回っている。統計ソフト R を用いて、二群の比率の差の検定を行ったところ、『市川森一脚本コーパス』と『鎌田敏夫脚本コーパス』の終助詞の割合には、有意水準である 5% をはるかに下回る数値 ( $p < 0.001$ ) が出たため、有意差が認められ、割合に差があることが確認された。

図 1、図 2 は、『市川森一脚本コーパス』『鎌田敏夫脚本コーパス』それぞれに現れた終助詞の上位 7 つを 10 万語あたりの調整頻度で表したものである。

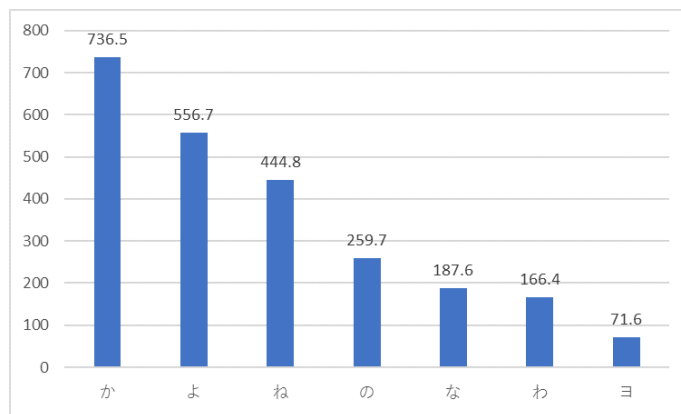


図 1 市川森一脚本コーパスに現れた終助詞上位 7 つ (10 万語あたり)

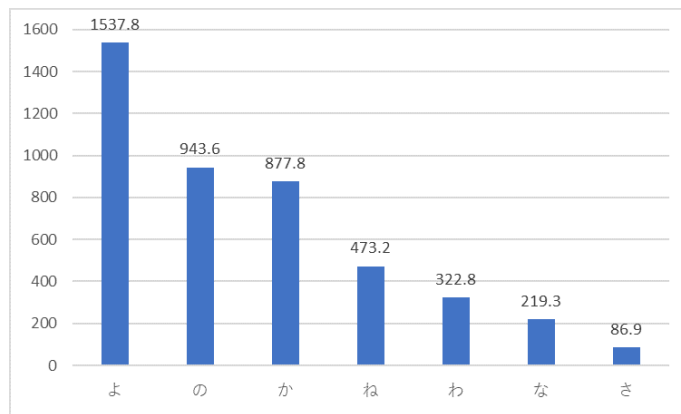


図 2 鎌田敏夫脚本コーパスに現れた終助詞上位 7 つ (10 万語あたり)

図1と図2を比較してみると、現れた終助詞の種類に大きな差は見られないが、分布がかなり異なっていることがわかる。

それぞれの脚本で用いられている終助詞の1位は「か」「よ」であるが、その数に注目すると、鎌田の脚本における「よ」は市川の脚本における「か」の倍近く使用されており、後続する「の」を大きく引き離している。これにより、鎌田がかなりの頻度で「よ」を使用していることがわかり、色々な種類の終助詞をまんべんなく使用するというよりは、かなり偏った終助詞の使い方をしていることがわかる。

さらに、市川はあまり「の」を使用していないが、鎌田は作品内で多用している点が目に付く。以下、鎌田作品から例を挙げる。

- (1) 俊行「こんな美人が、貞九郎の恋人になるわけじゃないの」(『男女7人秋物語』)
- (2) 良介「お前、余計なこと言わないでもいいの」(『男女7人秋物語』)
- (3) 法子「それを今後悔してるの」(『金曜日の妻たちへー恋におちてー』)
- (4) 桐子「だから昨夜、あなたを探したの」(『金曜日の妻たちへー恋におちてー』)

鎌田の作品では、特に男性の登場人物が「の」を多用している印象を受ける。「の」はイントネーションと用法により男性語・女性語・汎性語と区別される(中村 2000)が、実際のドラマではどのようなイントネーションで発声されていたか、その音声も含めた分析については、今後の課題としたい。

さて、先述の通り、『鎌田敏夫脚本コーパス』はほとんどが1980年代の作品である。そこで、『市川森一脚本コーパス』の1980年代の作品に現れた終助詞の上位7つを10万語あたりの調整頻度で算出した。結果を図3に示す。全作品の内の終助詞分布と変わらないので、図1とほとんど変わらないグラフとなっている。つまり、同じ年代の作品のみを比較した場合でも、市川と鎌田の間では、終助詞の分布がかなり異なっているといえる。

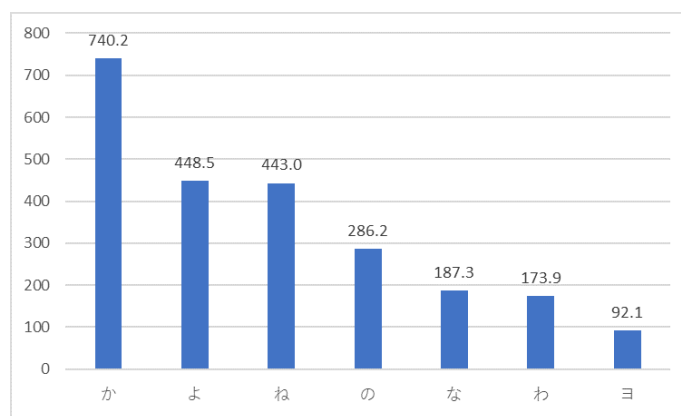


図3 1980年代市川森一脚本コーパスに現れた終助詞上位7つ(10万語あたり)

図3の7位に「ヨ」があるが、このような「ヨ」を含め『市川森一脚本コーパス』ではカタカナで表記された終助詞が多く見られた(松下 2019)。ところが、『鎌田敏夫脚本コーパス』には、「ねエ」や「なア」といったものはのぞき、カタカナで表記された終助詞はまったくみられない。これは、二人の脚本家の間にみられるスタイルの差と考えてよいだろう。

一方、『鎌田敏夫脚本コーパス』では『市川森一脚本コーパス』より感嘆符（！）と疑問符（？）が極端に多い、という点が目に付いた。図4は、『市川森一脚本コーパス』と『鎌田敏夫脚本コーパス』それぞれに現れた感嘆符と疑問符を10万語あたりの調整頻度で表したものである。

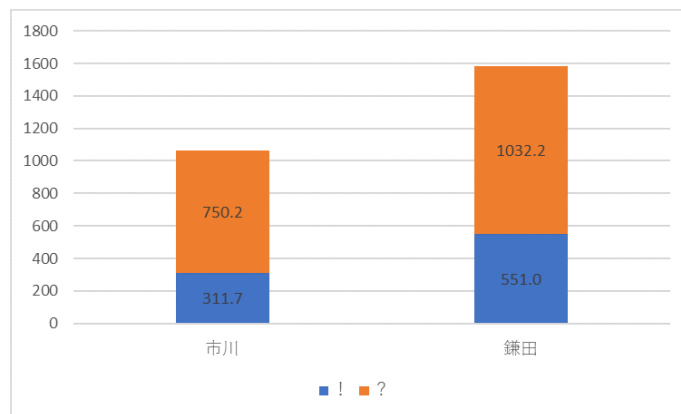


図4 各脚本コーパスに現れる感嘆符と疑問符（10万語あたり）

2つの記号の使用数を合わせたグラフを見ると、鎌田敏夫が市川森一を大きく上回って感嘆符と疑問符を使用していることがわかる。感嘆符と疑問符は、終助詞と同様、書き言葉において文末表現の一部を構成する要素である。市川の脚本では、終助詞を意図的にカタカナで表記することで、登場人物の感情や場面の様子を汲み取りやすくする役者への配慮をしていた（松下2019）。一方、鎌田の脚本では、感嘆符や疑問符を多用することにより、場面の様子や登場人物の心情を役者が拾いやすくしていたのではないかと考えられる。

- (5) 桃子「(とうとう頭にきて) うるさいわね！煮込み食べたら、さっさと帰りなさいよ！」（『男女7人夏物語』）
- (6) 真弓「来てよ！早く！助けて！」（『金曜日の妻たちへ』）
- (7) 東彦「東彦「デートする彼女ぐらいいないのか？おまえ？」（『金曜日の妻たちへ』）
- (8) 明子「好きなんですよ、坂入さん？里美のことが？」（『ニューヨーク恋物語』）
- (9) 武「立ってろ！一日中立ってろ！」（『飛び出せ！青春』）

上記の例文のように、鎌田の作品では感嘆符と疑問符が非常に多い。特に感嘆符は、相手の名前のおとについていることが多く、相手の名前を強く叫んでいるシーンで多用されている。

#### 4.2 『市川森一脚本コーパス』と『鎌田敏夫脚本コーパス』の終助詞の男女差

この節では、4.1の終助詞全体の分布を受けたうえで、各脚本コーパスにおける終助詞の男女差について述べる。各脚本コーパスに現れる終助詞の数を、発話者の性別（女性登場人物と男性登場人物）にわけて集計した。結果を表2に示す。なお、ここで集計した女性登場人物と男性登場人物とは、発話数が多いメインの登場人物（作品によって5~7人）を指す。

図5、図6は、『市川森一脚本コーパス』『鎌田敏夫脚本コーパス』それぞれに現れる女性登場人物が用いた終助詞を10万語あたりの調整頻度であらわしたものである。

表2 市川森一と鎌田敏夫の脚本における総終助詞数（男女別）

	女性	男性
市川森一	3,512	5,724
鎌田敏夫	11,973	7,309

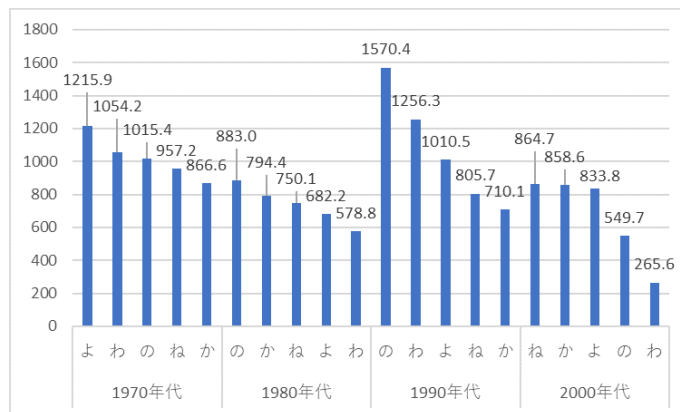


図5 『市川森一脚本コーパス』に現れた女性登場人物が使う終助詞（各期上位5つ、10万語あたり）

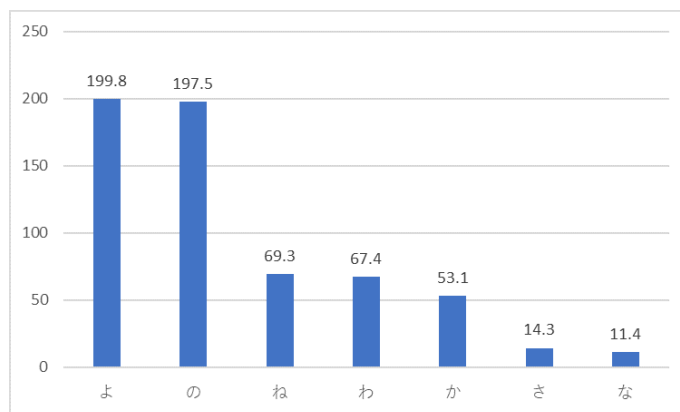


図6 『鎌田敏夫脚本コーパス』に現れた女性登場人物が使う終助詞（上位7つ、10万語あたり）

全体の終助詞の場合と同様、用いられている終助詞の種類に大きな差はないが、分布は異なっている。注目すべきは、女性の終助詞として代表的な「わ」である。『市川森一脚本コーパス』では、どの時代でも一定数「わ」が現れているが、『鎌田敏夫脚本コーパス』では順位自体も4位で、『市川森一脚本コーパス』に比べるとかなり数も少なくなっている。ただし、すべての「わ」が、いかにも女性らしい終助詞として使用されているかは、実際の音声含め、検討の余地がある。

次に、双方のコーパスの年代が重複する、図5の1980年代の部分と、図6に着目してみる。『市川森一脚本コーパス』では、上位5つの終助詞の使用数の差が小さいが、『鎌田敏夫脚本コーパス』では「よ」「の」の使用数がかなり多く、それ以下の終助詞の使用数に大差をつけて

いる。性差による比較という観点から見ても、鎌田はいろいろな種類の終助詞を使うより、限られた終助詞で作品を作っているということがわかる。

一方図7、図8は『市川森一脚本コーパス』『鎌田敏夫脚本コーパス』それぞれに現れる男性登場人物が用いた終助詞を10万語あたりの調整頻度であらわしたものである。

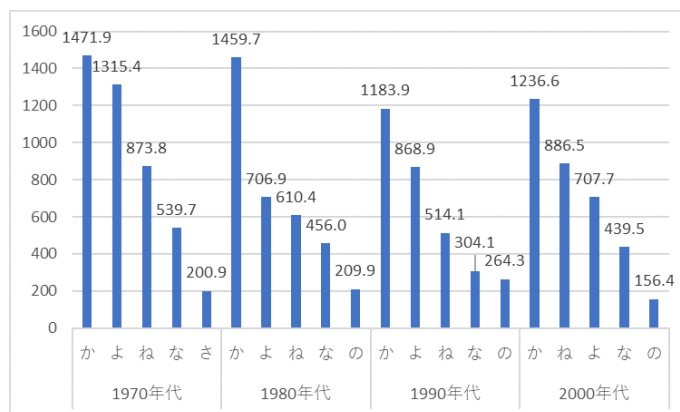


図7 『市川森一脚本コーパス』に現れた男性登場人物が使う終助詞（各期上位5つ、10万語あたり）

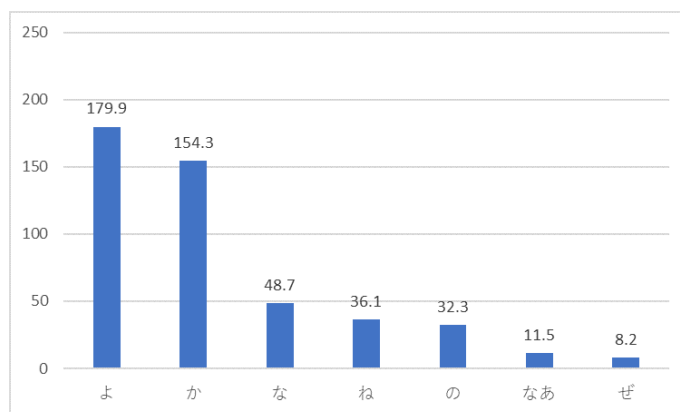


図8 『鎌田敏夫脚本コーパス』に現れた男性登場人物が使う終助詞（上位7つ、10万語あたり）

男性登場人物も女性登場人物と同様に、分布に差がある。特に、『市川森一脚本コーパス』ではどの年代でも使用数が1位だった「か」が、『鎌田敏夫脚本コーパス』では「よ」に続く2位となっている。下降調イントネーションを伴う「か」は女性よりも男性に顕著に現れると考えられるが、市川と鎌田で使用数に差があるのは、「か」に対する2人の脚本家の意識の違いがある可能性もある。この点についての検討は、脚本家自身にインタビューすることが必要だろうが、現時点では、脚本コーパスに見られる傾向を指摘するにとどめておく。

#### 4.3 2つの脚本コーパスとCEJCの終助詞の比較

この節では、『日常会話コーパス モニター公開版（以下、CEJC）』に現れる終助詞を、2つの脚本コーパスに現れる終助詞と比較する。前節で検討した脚本に現れた終助詞を、実際に話された言葉を収録したCEJCに現れた終助詞と比較することで、冒頭でも述べた通り、脚本が

持つ「話すことを前提として書かれた言葉」という特徴について考える。

表3 CEJCの総語数と終助詞数

	総語数	終助詞数	割合
女性	349,790	27,375	7.83%
男性	260,041	10,091	3.88%

図9は、CEJCに現れた終助詞の中で、男女を合わせた総数が上位10つのものをグラフにしたものである（なお、上位10位までの終助詞数の総数は、女性27,154語、男性18,791語である）。

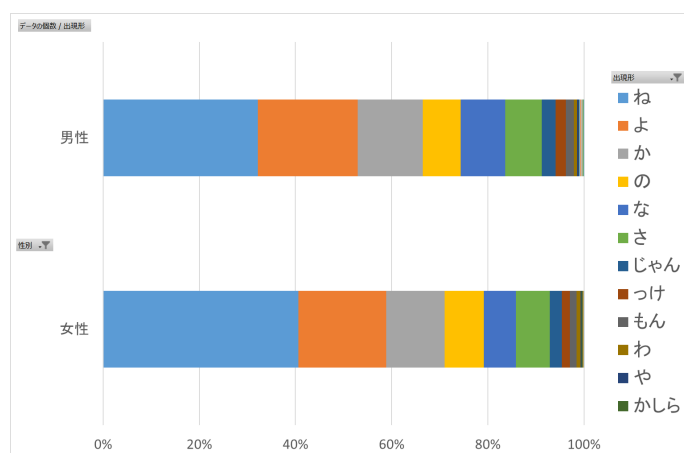


図9 CEJCに現れた終助詞の内訳

CEJCにおける結果（図9）を、脚本コーパスにおける結果（図1、図2）と比較してみると、現れた終助詞の種類に大きな差はないが、分布は異なっていることがわかる。CEJCで特に注目すべきは、男女ともに「ね」「よ」が半数以上を占めており、男女間で大きな差が見られないことである。これは、『鎌田敏夫脚本コーパス』に見られた、限られた数の終助詞が偏って用いられている傾向と類似している。

さらに松下(2019)で「男性らしさを想起する役割語」とした終助詞「さ」についてみると、CEJCでは男女間で同程度の割合で「さ」が用いられている。女性登場人物が用いる「さ」に限定すると、『市川森一脚本コーパス』ではかなり低い順位に登場し、その使用数もかなり少ない（図5）。一方で『鎌田敏夫脚本コーパス』の分析結果（図6）では、「さ」は6位で使用数も268回となっており、かなりの頻度で女性登場人物が「さ」を用いていることがわかる。

以上の結果は、次の2点にまとめることができる。

- 鎌田敏夫が用いている終助詞の分布は、市川森一に比べて、より実際の話し言葉に近い傾向がある。
- 市川森一は「男性的」「女性的」な終助詞を意識的に使い分け、実際の話し言葉に比べて、さまざまな終助詞をまんべんなく使用する傾向がある。

ここから考えると、「話すことを前提として書かれた言葉」としての特徴がより強いのは、市川森一の脚本であるということができる。

## 5. 考察

### 5.1 『市川森一脚本コーパス』と『鎌田敏夫脚本コーパス』の終助詞

『市川森一脚本コーパス』と『鎌田敏夫脚本コーパス』という2つの脚本コーパスに現れる終助詞全体の分布を比較すると、現れた終助詞の種類に大きな差はないが、分布が大きく異なることがわかった。特に顕著だったのは、市川はどの終助詞も一定数使用しているのに対し、鎌田は多用している終助詞とあまり使用していない終助詞の使用数に大きな差がある点である。このことから、市川がさまざまな終助詞をまんべんなく使用する傾向があるのに対して、鎌田は限られた終助詞を使用する傾向があると考えられることができる。

さらに、『市川森一脚本コーパス』では多用されていたカタカナ表記の終助詞が、『鎌田敏夫脚本コーパス』ではまったく現れていないことも特徴的であった。この理由として挙げたのは、鎌田による感嘆符と疑問符の多用という点である。松下(2019)では、市川の脚本において、カタカナ表記の終助詞は、登場人物の性格や感情を役者に拾いやすくするメッセージであると結論付けた。これと似た効果を持つ手段として、鎌田は疑問符や感嘆符を多用しているのではないかと考えられる。

### 5.2 『市川森一脚本コーパス』と『鎌田敏夫脚本コーパス』の終助詞の男女差

各脚本コーパスに現れる女性登場人物・男性登場人物が用いる終助詞の分布を比較すると、終助詞全体の分析と同様に、終助詞の種類に大きな差はなかったが、分布に違いがみられた。特に、「女性的」「男性的」という点から「わ」「か」に注目すると、市川は「わ」をどの時代でも一定数用いている一方で、鎌田も「わ」を用いてはいるものの、市川に比べるとかなり少なく、使用数の順位を見ても、かなり低い。また、「か」に関しても、市川ではかなり使用されていて、全体でも年代ごとでも使用数が1位だったが、鎌田は終助詞全体の中でも3位であり、男性登場人物だけでみても「よ」に続く2位となっている。とはいえ、市川・鎌田ともに「か」「よ」がよく使われていることから、これらが脚本における中核的な終助詞として位置づけられると考えられる。

### 5.3 2つの脚本コーパスとCEJCの終助詞の比較

2つの脚本コーパスとCEJCに現れる終助詞の分布を比較したところ、実際の話し言葉(CEJC)に見られる終助詞の分布と近いのは、鎌田敏夫の脚本であることがわかった。特に終助詞の分布が男女間で大差がないこと、少数の終助詞が全体の過半数を占めることや、女性登場人物が男性的な終助詞である「さ」を多用している点などは、『鎌田敏夫脚本コーパス』とCEJCの間で共通する特徴である。このことから、鎌田はより市川に比べ、現実の終助詞の使い方により即した使用をしていると結論することができる。一方、市川は多様な終助詞を使い分けることによって、役者へのメッセージ性をより強めている可能性がある。

この脚本とCEJCとの比較から、鎌田より市川の脚本の方が、「話すことを前提として書かれた言葉」としての特徴をより強く持っていると考えられることができる。ただし、これは終助詞

の分布に限った結論である。鎌田が終助詞の使用に関してあまりこだわりを持たず、自分や周囲の人間が使う「日常的な」終助詞を作品に取り入れているだけかもしれない。いわゆる「話すことを前提として書かれた言葉」という特徴が表面化する部分が、鎌田にとっては終助詞以外のところにある可能性もある。引き続き、多角的な分析が望まれる。

## 6. おわりに

本稿では、脚本の文体分析のひとつとして、2つの脚本コーパスに現れた終助詞の分析を行った。また、実際の日常会話を収録したCEJCと比較することによって、脚本の文体的特徴について検討した。

市川森一と鎌田敏夫の脚本に現れた終助詞を比較すると、類似点よりもむしろ、異なる点の方が多かった印象を受ける。役者へのメッセージという「話すことを前提として書かれた言葉」の特徴として、市川の終助詞分析で挙げた点は、鎌田には見られなかった。一方、鎌田はまた市川とは違った手段で、役者へのメッセージを表現している可能性が認められた。また、CEJCとの比較により、実際の話し言葉との共通点・相違点を挙げる事ができた。

今後の課題として、以下の点を挙げる事ができる。まず、書き言葉と話し言葉の間に位置付けられる脚本の特徴を見つけ出すためにも、書き言葉との比較をする必要がある。BCCWJの会話文に付与された発話者データ(山崎 2018)を用いることにより、小説の会話文(「書き言葉として会話文」と脚本(「話すことを前提として書かれた言葉」)の違いを明らかにすることができるだろう。さらに、市川・鎌田が脚本を執筆した年代が一致していないこと、CEJCの収録年(2016年以降)と鎌田とでは約30年のずれがあることなど、執筆年・収録年の違いを埋めるための調整が必要となるだろう。さらに多角的な分析を進めることにより、「話すことを前提として書かれた言葉」としての特徴を見つけていくことを、今後の課題として挙げておきたい。

## 謝 辞

本研究は、科研費基盤(B)「脚本クロニクル」サイト構築とその教育活用および国際発信(JP 17H02598、研究代表者 藤田真文)、科研費基盤(B)「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究(JP16H03426、研究代表者 丸山岳彦)、国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー 小磯花絵)によるものである。脚本データを提供していただいた日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム(NKAC)の石橋映里氏、青木隆平氏に感謝いたします。

## 文 献

1. 中村純子(2000)「終助詞における男性語と女性語」『信州大学留学生センター紀要』1, 1-11. 信州大学留学生センター紀要.
2. 松下晶子・丸山岳彦(2018)「脚本テキストに基づくコーパス文体論の可能性 —テレビドラマ脚本に注目して—」『言語資源活用ワークショップ 2018 発表論文集』, 256-265. 国立国語研究所.
3. 松下晶子(2019)「テレビドラマ脚本で用いられる終助詞について：年代差・性差・表

記差の分析」『コーパスと文体論のインタフェース 2018 発表論文集』, 1-14.

4. 山崎誠 (2018) 「翻訳小説と日本語小説における会話文の計量語彙論的比較」『語彙研究』 15, pp.1-15. 語彙研究会.